RIRC
宗教情報リサーチセンター

（公財）国際宗教研究所　宗教情報リサーチセンター

「ラーク便り」　研究ノート

→他の論文・研究ノート・小特集のバックナンバーは**こちら**をご覧下さい。

＊印刷してご利用の際は 2 頁目以降を印刷して下さい。

研究ノート

北インド・ヒンドゥー祭事暦（3）

虫賀幹華

はじめに

前回の「北インド・ヒンドゥー祭事暦（2）」の最後に、北インドで現在行われているヒンドゥーの祭事は、それぞれの起源や性質を見ていくと、古いもの、新しいもの、サンスクリット語文献に起源の辿れるいわゆる「正統ヒンドゥー教」的要素が強いもの、より民俗的で特定の地域でしか行われないようなもの、それらが雑多に混じって、1年間のサイクルを形成しているという筆者の見方を記述した[1]。本連載はあくまで、5年以上のインド滞在で得た見聞に基づき、2010年代のヒンドゥー教の祭事空間を記録しておくことが第一の目的であるが、どのように「雑多」なのかということも、今回は少し、具体的に考えてみたい。

前回は雨季の終わり、アーシュヴィナ月の黒分（満月の翌日から新月までの15日間）までを扱った。今回は秋から初冬にかけて、アーシュヴィナ月の白分（新月の翌日から満月までの15日間）にはじまり、カールティカ月、マールガシールシャ月の祭事を扱う。月名や暦の仕組み、また筆者が居住した都市や大家の情報については「北インド・ヒンドゥー祭事暦（1）」を参照されたい[2]。

2019年10月～12月の祭事

日付（2019年）	月名	ティティ	祭事名
9月29日～10月7日	アーシュヴィナ	白1～9	ナヴ・ラートリ
10月2日		―	マハートマー・ガーンディー生誕祭
10月8日		白10	ヴィジャヤ・ダシャミー（ダシャハラー）
10月13日		白15（満月）	シャラド・プールニマー
10月17日	カールティカ	黒4	カルワー・チョウト
10月25日		黒13	ダンテーラス
10月26日		黒14	ナラク・チャトゥルダシー
10月27日		黒15（新月）	ディーパーワリー
10月28日		白1	アンナクート／ゴーヴァルダン・プージャー
10月29日		白2	バイヤー・ドゥージュ／チトラグプタ・プージャー
11月2日		白6	ダーラー・チャット
11月5日		白9	アーンウラー・ナウミー
11月8日		白11	トゥルスィー・ヴィヴァーハ
11月10日		白14	ヴァイクンタ・チャトゥルダシー
11月12日		白15（満月）	カールティカ・プールニマー／グル・ナーナク生誕祭
11月19日	マールガシールシャ	黒8	バイラヴ・アシュタミー
12月1日		白5	ラーム・ヴィヴァーハ
12月25日		―	クリスマス

＊秋のナヴ・ラートリ（九夜祭）

9日間続くナヴ・ラートリは、1年に2度、春と秋に祝われる。「北インド・ヒンドゥー祭事暦（1）」

の春のナヴ・ラートリの項目で記述したさまざまな規則や儀礼、すなわち、各家庭の寺院に壺を設置し、土を敷いて大麦を撒き、9つの姿で現れるドゥルガー女神の礼拝をし、毎日『ドゥルガー・サプタシャティー（ドゥルガー女神の七百頌）』を読み、穀物を避ける食事の節制をし、8日目か9日目に9人の少女を饗応するといったことは秋のナヴ・ラートリでも行われる。ただし、女神信仰の要素がより強くあらわれるのは春よりも秋のナヴ・ラートリにおいてである。

8世紀頃の作品であると考えられる『ドゥルガー・サプタシャティー』[3]の中核は、女神による魔神（*asra*）討伐の3つの物語である。そのうちのひとつである水牛の魔神（*mahiṣāsra*）退治の話が現在では最も有名である。秋のナヴ・ラートリの8日目は、「ドゥルガー・アシュタミー（ドゥルガー女神の8日目）」あるいは「マハー・アシュタミー（偉大なる8日目）」とも呼ばれ、この日にドゥルガー女神が水牛の魔神を退治したと考えられている。街のいたるところに、水牛の魔神を殺害した女神としてのドゥルガー（*mahiṣāsra-mardinī*）像を祀る大小の仮設寺院が出現する（写真1）。そこではナヴ・ラートリの5日目くらいから歌や説法（*pravacan*）などの行事が催され、8日目と9日目にむけて盛り上がっていく。

10日目には、仮設寺院に設置されたドゥルガー女神を水に流す（*visarjan*）。イラーハーバードではガンジス川に、ガヤーではブラフマサローヴァルという名前の池に、音楽を鳴らし掛け声をかけて大騒ぎしながら、人びとが像を運んでくる。「北インド・ヒンドゥー祭事暦（2）」で紹介した、西インドの大都市ムンバイーでのガネーシャ祭の項目でも記述したように[4]、近年は環境保護のため、

（写真1）ドゥルガー女神像に花輪をかけているところである。イラーハーバードでは、高等学校の敷地内や結婚式会場、広場などにドゥルガー女神を祀るパビリオンが設置された。そのうちの多くは、この街に住む東インドのベンガル地方出身者のグループが主催するものであった。ベンガル地方は女神信仰が盛んであり、秋のナヴ・ラートリ（ドゥルガー・プージャー）はベンガル最大のお祭りであるといっても過言ではない。

像を川や海に投げ込むことが行政によって制限されるようになった。2014年10月イラーハーバードにおいて、ドゥルガー女神像を流すのはガンジス川の岸辺の一区画のみに限って認められていた。ウェブ版のTimes Of Indiaの報道によると、これはイラーハーバード高裁の指令に基づき、県庁がとったはじめての措置であったという[5]。

＊ヴィジャヤ・ダシャミー（勝利の第10日目）

この日は、叙事詩『ラーマーヤナ』の主人公であるラーマ王子が、ランカー島に攻め込み魔王ラーヴァナに勝利したことが祝われる。ヒンドゥー教徒の通常の会話では「ダシャハラー」と呼ばれることが多い[6]。広場などで、10の顔をもつラーヴァナの巨大な張りぼて人形が燃やされる。筆者が観察したときには、体中に爆竹が仕掛けられたラーヴァナの人形は凄まじい音とともに2分足らずで燃え尽きてしまった（写真2）。スマートフォンで写真やビデオを撮りながらそれを見ていた人びとは、「ジャイ・シュリーラーム！（ラーマ王子万歳！）」と口々に叫んだ。

バナーラスで出版された『12か月のヒンドゥーの聖なるヴラタと祭り（*Bārah Mahīnon ke Hinduon ke Pavitra Vrat aur Tyauhār*）』には、「ホーリー、ディーパーワリー、ラクシャー・バンダンのほか、我々の4つの主な祭礼のうちのひとつが、ヴィジャヤ・ダシャミーである。北インドから南インドまで全国で、すべてのカーストの人びとがこの祭りを賑やかに祝う。古代から、クシャトリヤ、王族、軍人たちの特別な祭礼であると考えられてきた」とある[7]。

＊シャラド・プールニマー（秋の満月）

1年で最も大きく美しい「秋の満月」は、日本の中秋の名月にあたるといえる。この日の夜、月光を通して地上に甘露（*amṛta*）がしたたり落ちると信じられている。甘露が落ちることを期待して、乳がゆ（*khīr*）を作って屋上に一晩置き翌日に食べる習慣がある。

シャラド・プールニマーの翌日からは、雨季のシュラーヴァナ月と並んで吉兆な月であるカールティカ月がはじまる。1か月間毎日、川に沐浴をしに行く人もいる。シュラーヴァナ月がシヴァ神の月であったのに対して、カールティカ月はヴィシュヌ神の月である。ガヤーの最も大きなヴィシュヌパダ（ヴィシュヌ神の足跡）寺院は、カールティカ月の夜は特に、ヴィシュヌ神の千の異名を唱えながらトゥルスィー（シソ科カミメボウキ）という植物をヴィシュヌパダに捧げるという儀礼を行う人たちで混雑する。トゥルスィーはヴィシュヌ神の配偶者であるラクシュミー女神の化身であ

（写真2）団地の敷地内で行われた魔王ラーヴァナの燃焼（*rāvaṇa-dahana*）

ると考えられ、ヒンドゥー教徒にとって聖なる植物である。家には必ずトゥルスィーが植えられている。筆者が初めに住んだガヤーのカーヤスタの家では、カールティカ月には毎晩、嫁姑が二人で屋上の中央に植えられたトゥルスィーに灯火を供え、祈りを捧げていた（写真3）。秋のナヴ・ラートリのドゥルガー女神のように、ラクシュミー女神の像が安置される仮設寺院が街のあちこちに出現する。

（写真3）

＊カルワー・チョウト（水差しの第4日目）

前回および前々回の「祭事暦」で紹介してきたように、ヒンドゥーの女性たちは「スハーグ（夫が存命であることの幸福）」を得ることを願ってさまざまなヴラタ（飲食の節制や儀礼をともなう願掛け）を行う。この「カルワー・チョウト」もまた、スハーグのために行われる女性のヴラタである。前回記述したバードラパダ月の「バフラー・ガネーシュ・チョウト」と同じく、月が見えるまで水すら飲めない節制を行う。夜、新しいサリーを着て化粧をし、儀礼をする。儀礼の場を右繞して「カルワー *karvā*」と呼ばれる飲み口のついた水差しによって一か所に水を注ぐのを4度繰り返し、カルワー・チョウトにまつわる説話（*kathā*）を読み、最後に粉ふるいのような網を通して、月と夫を見る（写真4）。

このヴラタはもともと、北西インドのパンジャーブ地方という特定の地域でのみ行われていた。イラーハーバードとガヤーの4軒の大家家族、親戚、借家人たちのなかで、唯一行っていたのはイラーハーバードのブラーフマンの家で隣の部屋を借りていたブラーフマンの女性だけであった。彼女はヴラタが趣味のような人で、しばしば食事の節制をしていた。写真4は、筆者がヒンドゥーの祭事に興味を持っていることを知る大学の友人（シュードラに属す低カーストの出身）の実家で撮影したカルワー・チョウトである。大家族がひとつの家に住んでおり、6人の女性が一緒になって屋上でカルワー・チョウトの儀礼を行ったが、この家に住んでいてもやらないという女性もいた。

（写真4）

他の「スハーグ」のためのヴラタがどこか古臭い印象を受けるのに対して、カルワー・

チョウトだけは「おしゃれな」ヴラタとして若者にも受け入れられている。もともとパンジャーブの祭事だったのが地域を超えて広まったのは、1995年の *Dilwale Dulhania Le Jayenge*（邦題『シャー・ルク・カーンのDDLJラブゲット大作戦』）という有名なボリウッド映画が、カルワー・チョウトを魅力的に描いたことがきっかけであるとみられる。シャー・ルク・カーンとカジョールという国民的スターが演じたカップルが、お互いのためにカルワー・チョウトのヴラタを行う。この映画が、カルワー・チョウトは妻が夫のために行うだけではなく、夫が妻のためにも行えるのだという「新しい価値観」をはじめて提供し、映画のロマンティックな雰囲気も助けになり、ヴラタを行う人が増えたと考えられる[8]。2018年10月25日の地元のヒンディー語新聞「ヒンドゥスターン」には、男性もやるようになったということに加え、このヴラタが映画やテレビドラマの影響で変化し、商業化・ファッション化されたこと、「見せつけ（*dikhāvaṭīpan*）」の側面が大きくなっていることを指摘する記事が出ていた。

＊ダンテーラス（富の第13日目）からディーパーワリー（灯明祭）まで

北インドの多くの地域で祭事の日程を決めるのに採用されている「ヴィクラマーディティヤ暦」においては、チャイトラ月の白分1日目から新年がはじまることは「北インド・ヒンドゥー祭事暦（1）」に記述した通りである[9]。しかし、1年のサイクルに区切りをつけるという意味では、ディーパーワリー（「ディーワーリー」ともいわれる）のほうが新年祭的な雰囲気をもっているといえるかもしれない。実際のところ、ディーパーワリーが現代のヒンドゥーの人たちにとって1年のうちでも非常に重要なお祭りであるのに対し、ヴィクラマーディティヤ暦の変わり目はそれほど意識されていない。

ヒンドゥーの人びとは、ディーパーワリーに富の女神ラクシュミーを家に招き、繁栄を願う。ラクシュミーを迎えるために大掃除し、飾りつけをする。壁のペンキを塗り直し、家の外には電飾を設置する。ガヤーでは、街のあちこちにラクシュミー女神やカーリー女神の像を祀る小さな仮設寺院が設置された。ガヤーにいた2014、15年には、2週間くらい前から通りで男の子たちが爆竹を鳴らし始めていたが、大気汚染への懸念から政府が規制をはじめると非常に少なくなった。それでも、花火や爆竹は「不幸を追い払うために」ディーパーワリーには欠かせないので、いくら禁止されても当日にはやはりやるのだが。

カールティカ月黒分第13日目は、「ダンテーラス」である。いよいよディーパーワリーを迎える準備が本格化する。この日は銀製の食器を購入すると良いとされているが、銀製には手が出ない庶民はステンレス製を買ったりする。古い食器や調理器具を処分し、新しいものと取り換えることが重要なので、特に必要がなくても、スプーン一本でも購入すべきなのだ。ダンテーラスにまつわる説話が面白いので、次に紹介しよう。

あるとき、ヴィシュヌ神がラクシュミー女神とともに地上にやってきた。少しして、ヴィシュヌはひとりで南の方角に進むことになり、ラクシュミーに待っているように言った。しかしラクシュミーはヴィシュヌのあとに着いていった。しばらく歩いていったところにサトウキビ畑があり、ラクシュミーはサトウキビを一本折り齧り始めた。戻ってきたヴィシュヌがそれを見て、ラクシュミーに怒り、畑の持ち主のもとで12年間奉仕をするように言った。ヴィシュヌは乳海に戻り、ラクシュミーはその農民のところに滞在して彼の家を財で満たした。12年たち、ヴィシュヌがラクシュミーを迎えに来ても農民はラクシュミーを帰したがらなかった[10]。ラクシュミーは農民に言った。「もしお前が私をとどめておきたいなら。明日はダンテーラスだ。自分の家を掃除しなさい。夜に灯明をあげなさい。そうしたら私はお前の家に来る。そのときに私の礼拝をしなさい。ただし、私が姿を見せることはない」。農民は言われた通りにした。彼の家は財産と食物であふれた。こうして農民は毎年ラクシュミーの礼拝をするようになり、彼を真似て他の人まで行うようになった。[11]

翌日は「ナラク・チャトゥルダシー（地獄の第14日目）」である。「小さな（*choṭī*）ディーパーワリー」とも呼ばれ、この日にも家のなかに灯火を並べる。家の掃除を完了させ、特に、家のなかのごみ捨て場や下水道など不浄な場所に灯火が置かれる。筆者は気づくことができなかったが、『12か月のヒンドゥーのヴラタと祭り完全版（*Bārahon Mahīne ke Sampūrṇ Hinduon ke Vrat Tyauhār*）』は、この日に死を司るヤマ神（閻魔）に灯明が捧げられることを説明する[12]。『12か月のヒンドゥーの聖なるヴラタと祭り』は、ダンテーラスからディーパーワリーまでの3日間、ヤマ神に灯明を捧げてからラクシュミー女神の礼拝をするよう記述している[13]。

ディーパーワリーの日は新月である。秋が深まるこの時期の、月のない暗い夜に、灯明のお祭りが開催されるのは理に適っているのではないか。ラクシュミー女神を迎え入れる準備が着々と進む。色粉や、米をすりつぶした液などで地面に模様（*rangolī*）を書く。花やアショーカ樹の葉で玄関を飾り、ラクシュミー女神の足跡が描かれた小さなステッカーを貼る。筆者は足の指を外に向けて貼り、ラクシュミーが家に入ってくるように貼らなければならないと注意されたことがあった。色とりどりのお菓子やドライフルーツ、夜のラクシュミーの礼拝のときに捧げる供物が続々と家に到着する。供物は米や豆を煎ったもので、ディーパーワリーは「収穫祭」的な要素があったのではないかと想像したくなる（写真5）。皆で手分けしながら、灯火を準備する。土製の小さな皿に、綿をちぎって細くしたものと、油やギーを入れる（写真6）。それを、玄関をはじめ庭やベランダ、部屋のなかにも並べる。時間になるとラクシュミーの礼拝をする。家の寺院で行うこともあるが、カーヤスタの家ではラクシュミーの社が別に設置され、

（写真5）

（写真6）

（写真 7）

そこでは子どもたちが礼拝を行った（写真 7）。隣近所と供物のおすそ分けをしあったりする。ヒンドゥーの祭事では、豪華なものを食べるのではなく食べ物の節制があることをこれまでは見てきたが、ディーパーワリーの日に節制はなくごちそうを食べる。とはいえ、吉兆なカールティカ月中なので、家で非菜食料理を作って食べることはない。イラーハーバードでは、ディーパーワリーの日にはカリー *kaḍhī* というヒヨコ豆の粉をヨーグルトで溶いたものを入れて作る黄色いカレーと、ヒンディー語ではスーランというヤムイモの一種をつぶしたものを食べる習慣があった。儀礼や食事などがひと段落すると、屋上で花火をして楽しむ。規制が厳しくなかった頃は、夜中も花火と爆竹は鳴り止まなかった。

ディーパーワリーの翌日は、祭事について説明する本には「アンナクート（穀物の山）」や「ゴーヴァルダン・プージャー（牛を殖やす者の礼拝）」と呼ばれる祭事が行われるとある。ゴーヴァルダンとは、クリシュナ神が青年期を過ごしたとされるヴリンダーヴァンにあり、クリシュナによって持ち上げられた山のことである[14]。宮本久義によれば、バナーラスではヴィシュヌ派の寺院でお菓子や団子を天井まで山の形に積み上げ、クリシュナ神とゴーヴァルダン山の礼拝が行われているという[15]。

＊バイヤー・ドゥージュ（兄弟の第 2 日目）

シュラーヴァナ月最終日の満月の日に行われる「ラクシャー・バンダン」と、カールティカ月のディーパーワリーの 2 日後に行われる「バイヤー・ドゥージュ」は、兄弟姉妹の絆が確かめられる祭事である。バイヤー・ドゥージュの日には、綿を細長くして紐のような形状にし、ラクシャー・バンダンと同様に姉妹が兄弟の右手首に巻く。バイヤー・ドゥージュの起源を語る説話には、ヤマと妹のヤムナー（ヤムナー川）が登場する。この祭事は「ヤマ・ドヴィティーヤー」とも呼ばれる。

太陽神スーリヤは、妻サンジュニャーとのあいだにヤマとヤムナーをもうけた。サンジュニャーはスーリヤの強い光ゆえに夫と一緒にいることができず、別の場所でチャーヤー（「影」という意）として暮らし始めた。チャーヤーには別の子が生まれ、ヤマとヤムナーに対しては継母のような態度を示すようになった。不快に思ったヤマは母のもとを離れ、「ヤマの街（*yamapurī*）」をつくった。ヤマの街で罪人たちの懲罰が行われているのを見て、ヤムナーは「牝牛界（*goloka*）」に行ってしまった。長い時間が経った後、ある日、ヤマは急にヤムナーのことを思い出した。使者を牝牛界に送ってヤムナーを探させたが見つからず、ヤマ自身が赴いた。聖地マトゥラーにあるヴィシュラーム・ガートという名の沐浴場でヤムナーと出遭った。ヤムナーはヤマを歓迎して食事をふるまった。喜んだ

（写真 8）

ヤマはヤムナーに望みを聞いた。ヤムナーは、自分の水で沐浴をした人の罪が消えヤマの街に行かないようになることを頼んだ。ヤマは、この望みを受け入れてヤマの街が存在しなくなってしまうことを恐れ躊躇した。その様子を見たヤムナーは、カールティカ月白分2日目に姉妹の家で食事をし、このヴィシュラーム・ガートで沐浴をした者は、ヤマの街に行かないようにしてほしいと頼んだ。ヤマは望みを叶え、そして、この日に姉妹の家で食事をしない者をヤマの街に連れていくこと、ヤムナー川で沐浴する者は天界に行くことを宣言した[16]。

ヤムナー川での沐浴、ヤマの礼拝、姉妹の家での食事はこの日に薦められることだが、筆者はガヤーのカーヤスタの家で、風変わりな儀礼を観察した。牛糞で浄められた祭壇にレンガが置かれ、参加していた女性たちが共同で、太い木の棒を用いてレンガを割り壊したのである（写真8）。宮本がバナーラスの街かどで観察したのは、やはり女性たちが集まって、牛糞でヤマとヤムナーらしき絵をこしらえ、レンガを置いて絵を潰し、その上にスパーリー（ビンロウジュの実）を載せて杵で打ち砕くという過程である。これを宮本は「民間の風習」とし、双子の妹のヤミーがヤマを誘惑し拒絶したという『リグ・ヴェーダ』の記述をふまえ、「レンガで絵を潰したり、スパーリー（隠語で亀頭の意）を砕く行為は兄妹婚をいさめる意味があるのかもしれない」[17]と推測している。なおヤミーは、ポスト・ヴェーダ期には川の女神ヤムナーと同一視されるようになった[18]。

この日とその翌日には、ガヤーでは街なかに設置されたラクシュミー女神像やカーリー女神像が、市内の池に次々と流された。ダンテーラスから5日間続いたディーパーワリーのお祭りがこうして終了する。

＊チトラグプタ・プージャー（チトラグプタ神の礼拝）

ディーパーワリーの翌々日、すなわちバイヤー・ドゥージュの日には、北インドのカーヤスタ・カーストが自分たちの祖として崇拝するチトラグプタ神の礼拝が、カーヤスタの人たちによって行われる。チトラグプタは、ヤマ神のもとで人間のすべての善・悪行を記録する書記官である。ガヤーのカーヤスタの家では、屋上でバイヤー・ドゥージュの儀礼を女たちが行い、部屋のなかで男たちがチトラグプタの礼拝をして新しいペンやノートを供えていた。

ディーパーワリーの翌日は、「勉強してはいけない日」とされる。イラーハーバードの人たちはこの日を「パルワー（*paḍvā*）」と呼んでいたが、『ヒンディー語＝日本語辞典』は新月及び満月の翌

日はすべてパルワーであると説明している。ブラーフマンおよびクシャトリヤの両大家は、この日を「勉強してはいけない日」とするのはもともとカーヤスタの習慣だったのではと推測していた。翌日のチトラグプタ・プージャーで、新しい筆記用具を供えることと関係するように思われる。ただ、チトラグプタ・プージャーはカーヤスタ・カーストのみの祭事であり、筆者の手元にある4冊の祭事本には言及がない。

＊ダーラー・チャット（太陽神の第6日目）

この太陽神の祭事は4日間続き、ビハール地方で盛大に祝われる。ヴラタをする本人は、2日目の夜に決められたものを食べてから4日目の朝に太陽に閼伽水（*argha*）を捧げるまで、水も飲まない過酷な断食を続ける。ヴラタをする人は、通常のキッチンとは別に作った清められた場所で供物や自分の食事を作らなければならないが、訪問者や隣人、友人知人に配るおさがり（*prasād*）は家の女性たちが協力して大量に作ったりする。3日目の夕方と4日目の朝の閼伽水の捧げは、籠いっぱいの供物をもち、家族が連れ立って川や池に出かける。果物を中心として多くのものを捧げるので、お金のかかる祭事でもある。

「ナハーエ・カーエ（*nahāy-khāy*）」と呼ばれる1日目は、聖なる川や池で沐浴をして、かぼちゃのカレーとごはんを作って食べる。2日目の「カルナー（*kharnā*）」では、黒糖入りの乳がゆを作る。夕方まで断食をして、儀礼をしたあとにそれを食べ、訪問客にもふるまう。3日目が「チャット」すなわちティティの第6日目にあたり、最も大切な日となる。一日中断食をし、夕方、果物や野菜、「テークワー」と呼ばれる全粒粉と黒糖で作られる特別なお菓子を乗せた箕を大きな籠につめて、裸足で川や池に出かける。川や池までの道中では、ヴラタをする人は何度か立ち止まり、跪いて地面に頭をつけて太陽に祈りを捧げる。ヴラタをする人を崇拝対象として、通りすがりの人たちが敬意を示す。川や池では、沐浴をして、沈みゆく太陽に箕に乗せた供物と閼伽水が捧げられる（写真9、10）。供物はすべて家に持ち帰られ、まだ食べられない。4日目の早朝、上昇する太陽に供物と閼伽水を捧げ、おさがりを食べて断食が解かれる。この日や翌日は、家々を回っておさがりを届けたり、職場・学校に持っていき配る。

ガヤーには、朝、昼、夕方それぞれの太陽をあらわすスーリヤ神の像が安置されている3つの寺院があった。3日目の夕方の閼伽水の献供は夕方の太陽神の像がある寺院の目の前の池「スーリヤ・クンド（旧名はダクシナ・マーナサすなわち南のマーナサ湖）」が大変に混雑する。4日目の朝は、朝の太陽神像の方を目指す人が多い。こちらにもやはり池があり、「ウッタラ・マーナサ（北のマーナサ湖）」と呼ばれている。昼の太陽神像のある寺院はファルグ川に面している。ファルグ川では夕方も朝も混雑がみられた。

ダーラー・チャットはビハール地方で行われる祭りであるが、他の地域に住むビハール出身者はもちろん、そうではない人が好んでこのヴラタをやることもある。イラーハーバードではブラーフマンの大家の娘の友人の家（カーストはカーヤスタ）で、毎年ダーラー・チャットが行われていた。家の中庭で、ヴラタをする女性2人が、水をはった大きな洗面器の中央に立ち、供物を乗せた箕をもって、閼伽水を捧げるなどしていた。隣人や知人・友人の女性たちが集まって、チャットに関連する歌の会が行われた。

ナヴ・ラートリが春と秋に祝われるように、春のチャイトラ月にも4日間の「チャット・プージャー」があり同じように断食と太陽神の礼拝が行われる。秋の方が規模は大きいが、村ではチャイトラ月のチャット・プージャーの方のみを行うという人が多かったりもする。

（写真 9）夕方のスーリヤ・クンドでの閼伽水の捧げ。中央には、供物を並べ灯火が灯され準備が整った 3 つの箕が確認できる。

（写真 10）朝のファルグ川での閼伽水の捧げ。ヴラタをしている女性が供物を乗せた箕を抱え、閼伽水を家族たちが箕に注ぐ。閼伽水を入れた壺は一つだが、それをもつ人の腕に手を添えることで、その人も閼伽水を供えたことになる。

＊アーンウラー・ナウミー（マラッカノキを礼拝する第 9 日目）

ヒンドゥー教の世界には、前述のトゥルスィーのように、さまざまな聖なる草木が存在する。樹木ではボダイジュ（*pīpal*）やバンヤンジュ（*vaṭ*）が代表的である。西岡直樹も書いているように、ボダ

イジュの根はブラフマー神、幹はシヴァ神、枝はヴィシュヌ神であるとみなされ、崇拝されたり、木自体がヴィシュヌ神の化身であると考えられたりして、むやみに切ったり、傷つけたりしてはならないとされてきた[19]。筆者は、ボダイジュの木の根元に猿神ハヌマーンの祠が設えられているのをよく見かけた。バンヤンジュの垂れ下がる気根はシヴァ神のもつれ髪（*jaṭā*）として見られ、根元にシヴァリンガが祀られたりする[20]。

（写真 11）

アーンウラー *āṁvlā* とはマラッカノキのことで、カールティカ月白分9日目にはこの木の礼拝が行われる。普段は聖なる木としてよりも、アーンウラーの実は健康食材として認識されている。そのまま食べるには苦いが、漬物にしたり、砂糖を加えて甘く煮たりする。アーンウラーを浸して一晩おいた水は目に良いとされる。西岡によれば、インド医学の「アーユル・ヴェーダ」で薬効が高いとされた3つの果実のうちのひとつであった[21]。アーンウラー・ナウミーの日には、アーンウラーの木の下で儀礼を行い、アーンウラーを食べる。筆者はガヤーで、女性たちがアーンウラーの木の幹に赤い糸を巻きつけながら右繞する様子を観察した（写真 11）。

＊トゥルスィー・ヴィヴァーハ（トゥルスィーの結婚）

カールティカ月白分第11日目は、アーシャーダ月の白分第11日目から4か月間眠っていたヴィシュヌ神が目覚める日である[22]。この日、ヴィシュヌ神として崇拝される黒い菊石（*śāligrām*）と配偶者ラクシュミーの化身とみなされる聖なる草トゥルスィーの結婚が祝われる。ヒンドゥーの人びとの結婚式は、吉日をみて開催される。ヴィシュヌ神が眠っている4か月間には結婚は一切行われない。ヴィシュヌ神が目覚め、トゥルスィーとの結婚を終えると、人間たちの結婚式も再開されるのである。

＊カールティカ・プールニマー（カールティカ月の満月）

ヴィシュヌ神の月である吉兆なカールティカ月は、沐浴をするのに良い月である。最終日の満月の日は、沐浴に訪れる人で川は非常に混雑する。大変縁起の良い日であり、家庭や寺院でサッティヤ・ナーラーヤナ・カター[23]という儀礼を行う人も多い。「神の灯明祭（*deva-dīpāvalī*）」という名でも呼ばれ、川沿いに灯明が並べられる。カールティカ月の最後の5日間、第11日目のエーカーダシーの日から満月まで、穀物を食べない節制をする人もいる。

＊ラーム・ヴィヴァーハ（ラーマ王子の結婚）

マールガシールシャ月の白分第5日目は、ラーマとスィーターの結婚記念日が祝われる。ガヤーでは、最も大きな寺院であるヴィシュヌパダ寺院からラーマ王子を乗せた神輿が出て、楽隊と信仰者たちとともに街を練り歩き、翌日の夕方に同寺院にて婚姻の儀がとりおこなわれる（写真12）。ヒンドゥーの結婚式では、花婿が親類たちとともに馬に乗って、結婚式がおこなわれる新婦の家まで、楽隊とともに行進する。現代では馬は車に置き換えられ、結婚式も家ではなく専用の会場で行われることも多いが、新郎側による婚列の習慣は残っている。この婚列のことを「バーラート *bārāt*」というが、ラーマ王子の神輿の行進のことも「バーラート」といわれる。

豪華なラーマ王子の結婚式の費用を工面し準備をするのは、ヴィシュヌパダ寺院を管理しているガヤーの聖職者集団（*gayāvāla*）である。筆者がこれまで参照してきた1年間の祭事を概観する4冊の書籍に項目はないが、ガヤーでは街の人たちが楽しみにしている一大イベントである。ガヤーの聖職者集団の結婚式はチャートゥルマースヤ終了後も行われず、このラーマの結婚式を祝ってから結婚シーズンが開始される。

（写真12）

おわりに

総括は最終回となる次回に譲るが、今回扱った祭事の範囲で、冒頭で述べた現代におけるヒンドゥー祭事の「雑多さ」を示す具体例を挙げておきたい。

現代のヒンドゥー祭事のあり方にも注意を払いながらサンスクリット語文献におけるそれらの記述について詳細に検討を重ねた、永ノ尾信悟による複数の論文がある。「プラーナ文献が記述する秋の女神の大祭」は、秋のナヴ・ラートリと明白な関連をもつ祭事について、11種類のプラーナ聖典から26種の記述を拾い上げ、比較検討したものである。永ノ尾はそれらを次のように5つに分

類した：①アーシュヴィナ月白分の8日目や9日目の日に祭礼執行日を限るもの、②祭礼の期間をアーシュヴィナ月白分最初の9日間、さらには白分以前の日にまで広げるもの、③女神礼拝に加えて、幼い少女たちのもてなしの要素を伴うもの、④ねり粉で作った敵の像を剣で突く行為が特徴的な要素をなすもの、⑤武器や王の持ち物の礼拝が中心となるもの、である[24]。

細部まで見ることはできないが、ここで確認したいのは、各聖典の記述内容には大いに相違があること（唯一絶対の規則はないこと）、現代のナヴ・ラートリのさまざまな要素が文献に辿れること、しかし同時に、筆者が観察したナヴ・ラートリにおいては原則となっていた壺の設置、大麦の撒布、『ドゥルガー・サプタシャティー』の読誦、穀物を避ける食事の節制、少女の饗応といったものが必ずしも多数のプラーナ聖典が規則として定めているものではないことである。現代の秋のナヴ・ラートリで礼拝される「水牛の悪魔を殺した女神」としてのドゥルガーとの直接の関係を示唆する記述は、永ノ尾によれば26のうち5つのみであるという[25]。動物供犠と距離を置く態度を示す文献こそが、少女たちのもてなしと『デーヴィー・マーハートミヤ』（註3参照）の読誦を勧め、それは3つのみであるという指摘も興味深い[26]。つまり、現代において「聖典に基づき正しい」として実践されているさまざまな規則・儀礼は、幾種もの聖典の記述の取捨選択によって形成されたといえる。

もちろん現在の習慣のなかには、聖典の記述とは直接的に結びつかない部分も含まれている。例えば、穀物を避ける食事の節制において、具体的に何を食べればよいのかは各家庭においてさまざまであったりもする。また、ヴィジャヤ・ダシャミーについて現代のヒンディー語の本は年間の4つの重要な祭礼のうちのひとつとし、「古代から王族、軍人たちの特別な祭礼であると考えられてきた」とするが、歴史的に文献を辿ると必ずしもそうとはいえない印象を受ける。少なくとも永ノ尾が調査した26の記述において、「秋の女神の大祭」の説明と、ラーマとラーヴァナの戦いを関連付けて書いたものは2つのみであった[27]。ヴィジャヤ・ダシャミーが重要な祭礼として捉えられるようになったのは、近世以降の北インドにおけるラーマ信仰の高まりと関連があるだろう。

バイヤー・ドゥージュのレンガを割り壊す風変わりな儀礼について、宮本は「民間の風習」としながら、妹のヤミーがヤマを誘惑し拒絶したという『リグ・ヴェーダ』の記述をその背景として想定している。また宮本はディーパーワリーについて、「光明の象徴ともいえるラクシュミー女神とパラレルに、死の象徴であるヤマの影が見え隠れすることは、新年祭の要素をうかがわせて非常に興味深い」と指摘する[28]。明暗の混在というだけでなく、ヤマというヴェーダ時代からの古い神への礼拝と、ヒンドゥー教のヴィシュヌとラクシュミーの信仰とが混交しているところも非常に面白い。そして、米や豆を煎ったものが供物とされることで、「収穫祭」的な要素があったのではないかとも思われる。どのような経緯を経て、ダンテーラスからバイヤー・ドゥージュまでを含む現在のディーパーワリーになったのだろうか。永ノ尾のように文献の記述を辿ってみると何が見えてくるだろうか。

シュラーヴァナ月がシヴァ神の月でカールティカ月はヴィシュヌ神の月であるだとか、チャートゥルマースヤのあいだにはヴィシュヌが眠っていて結婚式など吉事がおこなわれないとか、現代の人びとが「古くからの原則である」と信じている（がヴェーダ時代には明らかに遡れない）ものは、どのように形成されてきたのだろうか。他方、バイヤー・ドゥージュの儀礼はヴェーダにおけるヤマとヤミーの話が背景になっている可能性があるように、ヒンドゥー教のさまざまな信仰形態にヴェーダの宗教の要素はどのように残っているのか。シャラド・プールニマーに甘露が落ちることを信じて屋上に乳がゆを置くのは、カールティカ月白分9日目にこそアーンウラーの木を礼拝するのは、何に基づく習慣だろうか。何度か紹介してきたヒンディー語の祭事本が記述する説話の類は、どこ

に起源をもつのだろうか。

現代のヒンドゥーの祭事について理解するには、文献の記述を収集しその祭事の成り立ちや背景を探ることが不可欠である。他方で、すべての要素を聖典の規則に帰着させることはできない。映画をきっかけとして、新しい価値を付与されたカルワー・チョウトが広まったのが良い例である。限られた地域で行われていたカルワー・チョウトや、ビハール地方のダーラー・チャットについて、聖典に記述がみつかるだろうか。また環境問題を背景に、神像を水に流すのに新しい規則が作られたりしている。儀礼のやり方は、時代に応じて変化していくものである。本連載は、祭事という視点からヒンドゥー教とはどのような宗教なのかを捉える一つの小さな試みであるともいえる。

註

1 虫賀幹華、「北インド・ヒンドゥー祭事暦（2）」、『ラーク便り』84号、2019年、70～71頁。

2 虫賀幹華、「北インド・ヒンドゥー祭事暦（1）」、『ラーク便り』83号、2019年、93～96頁。

3 小倉泰・横地優子、『ヒンドゥー教の聖典二篇 ― ギータ・ゴーヴィンダとデーヴィー・マーハートミャ』（東洋文庫、2000年）、260頁。なお、現在は『ドゥルガー・サプタシャティー』の名で有名である聖典は、もともとは『マールカンデーヤ・プラーナ』の一部を占め、後代に『デーヴィー・マーハートミヤ』として独立したものである。

4 虫賀、「北インド・ヒンドゥー祭事暦（2）」、68頁。

5 “Work starts on ponds for idol immersion,” in Times of India, 2014年9月22日。http://timesofindia.indiatimes.com/city/allahabad/Work-starts-on-ponds-for-idol-immersion/articleshow/43144453.cms（最終閲覧日：2020年2月22日）

6 永ノ尾信悟は「ダシャハラー」という名称について、先行研究に言及しながら、元来ジェーシュタ月白分10日目の「ガンガー・ダシャハラー」（「北インド・ヒンドゥー祭事暦（1）」、103頁参照）こそが「ダシャハラー」であったが、それがアーシュヴィナ月白分10日目にも転用されたという説を支持している。永ノ尾信悟、「プラーナ文献が記述する秋の女神の大祭」、『東洋文化』第73号、1993年、148頁。

7 Punīt Miśra, *Bārah Mahīnon ke Hinduon ke Pavitra Vrat aur Tyauhār* (Varanasi: Rupeś Ṭhākur Prasād Prakāśan, n. d.), p. 79.

8 次のウェブサイトの記述も参考にした。Oshin Fernandes, “DDLJ: How Raj and Simran made Karwa Chauth a pan-India festival,” in the Free Press Journal, 2019年10月15日。https://www.freepressjournal.in/entertainment/ddlj-how-raj-and-simran-made-karwa-chauth-a-pan-india-festival（最終閲覧日：2020年2月22日）

9 虫賀、「北インド・ヒンドゥー祭事暦（1）」、95～96頁。

10 このあと、ヴィシュヌの指示通りに農民がガンジス川に沐浴に行き、子安貝を流す場面などがあるが結末に関係ないのでここでは省略した。

11 Miśra, *Bārah Mahīnon ke Hinduon ke Pavitra Vrat aur Tyauhār,* p. 93.

12 Hīrāmaṇi Singh, *Bārahon Mahīne ke Sampūrṇ Hinduon ke Vrat Tyauhār* (Allahabad: Durgā Pustak Bhaṇḍār, n. d.), p. 130.

13 Miśra, *Bārah Mahīnon ke Hinduon ke Pavitra Vrat aur Tyauhār*, p. 94.

14 ゴーヴァルダン山にまつわる神話について詳しくは、宮本久義、「バナーラス祭事記をとおして北インドの祝祭空間を解読する」、『ヒンドゥー聖地　思索の旅』（山川出版社、2003年）、218頁を参照。

15 宮本、前掲書、218 ～ 219 頁。筆者はガヤーとイラーハーバードでのこの日の寺院の様子は確認できなかった。ガヤーのカーヤスタの家では、借家人の子どもたちもあわせて、ままごとを行っていた。写真 7 の祠の前にも映っている、子どもたちによるラクシュミー女神の礼拝でも用いられた小さな調理器具を使いながら、本物の火を使って煮炊きをした。イラーハーバードでは、象や馬の形をした砂糖菓子がディーパーワリーの供物として捧げられるが、ここにもままごと的な要素がみられる。結論を出すにはさらなる調査が必要だが、これらは「アンナクート」との関連がありそうにもみえる。

16 Singh, *Bārahon Mahīne ke Sampūrṇ Hinduon ke Vrat Tyauhār*, p. 239.

17 宮本、「バナーラス祭事記をとおして北インドの祝祭空間を解読する」、219 頁。

18 Monier Monier-Williams, *A Sanskrit-English Dictionary* (Oxford: Oxford University Press, 1899), p. 846.

19 西岡直樹、『定本　インド花綴り』（木犀社、2002 年）、35 頁。

20 西岡、前掲書、39 頁。

21 西岡、前掲書、162 頁。

22 ヴィシュヌ神が眠っている期間「チャートゥルマースヤ」については、「北インド・ヒンドゥー祭事暦（2）」、59 頁を参照。

23 サッティヤ・ナーラーヤナ・カターについては「北インド・ヒンドゥー祭事暦（1）」、99 ～ 100 頁を参照。

24 永ノ尾、「プラーナ文献が記述する秋の女神の大祭」、121 ～ 122 頁。

25 永ノ尾、前掲書、150 頁。

26 永ノ尾、前掲書、136 ～ 137、150 ～ 151 頁。

27 永ノ尾、前掲書、134、150 頁。

28 宮本、「バナーラス祭事記をとおして北インドの祝祭空間を解読する」、219 頁。

参考文献

Bahan, Āśā. *Bhāratīya Vrat-Parv-Tyauhār aur Mahilā Sangīt*. Haridwar: Raṇdhīr Prakāśan, n. d.

永ノ尾信悟、「プラーナ文献が記述する秋の女神の大祭」、『東洋文化』第 73 号、1993 年、121 ～ 163 頁。

古賀勝郎・高橋明編、『ヒンディー語＝日本語辞典』、大修館書店、2006 年。

Miśra, Punīt. *Bārah Mahīnon ke Hinduon ke Pavitra Vrat aur Tyauhār*. Varanasi: Rupeś Ṭhākur Prasād Prakāśan, n. d.

宮本久義、「バナーラス祭事記をとおして北インドの祝祭空間を解読する」、『ヒンドゥー聖地　思索の旅』、山川出版社、2003 年、189 ～ 235 頁。

Monier-Williams, Monier. *A Sanskrit-English Dictionary*. Oxford: Oxford University Press, 1899.

虫賀幹華、「北インド・ヒンドゥー祭事暦（1）」、『ラーク便り』第 83 号、2019 年、93 ～ 107 頁。

————、「北インド・ヒンドゥー祭事暦（2）」、『ラーク便り』第 84 号、2019 年、58 ～ 72 頁。

西岡直樹、『定本　インド花綴り』、木犀社、2002 年。

小倉泰・横地優子訳注、『ヒンドゥー教の聖典　二篇 ― ギータ・ゴーヴィンダとデーヴィー・マーハートミャ』、東洋文庫、2000 年。

Śarmā, Hanumān. *Vrat-Paricay*. Gorakhpur: Gita Press, 2012.

Singh, Hīrāmaṇi. *Bārahon Mahīne ke Sampūrṇ Hinduon ke Vrat Tyauhār*. Allahabad: Durgā Pustak Bhaṇḍār, n. d.